

収蔵展 開催中

「自筆から見る浜松ゆかりの文人たちⅢ」



文芸館の収蔵資料の中から、山根七郎治・菅沼五十一・清水みのるの自筆原稿、絵画、書籍等を展示しています。

同時に、夏目漱石や森鷗外、太宰治等、著名な作家の手稿も展示いたしました。

自筆だから伝わる迫力、繊細さをお楽しみください。

平成28年1月24日(日)まで

※ 12月29日(火)～1月3日(日)は、休館

浜松文芸十人の先駆者紹介

その5

《偉大なる土の俳人：松島十湖》

松島十湖の生家は、由緒ある農家で、耕地もかなりの面積を所有していたが、近くを流れる天竜川の洪水でたびたび田畑を荒らされ、生活はそれほど楽ではなかった。

5歳から読書・習字などを学び、10歳で漢籍・書道・仏典を学んだ。十湖は、洪水で荒れた田畑の復旧に力を尽くしながらも、俳諧の修行に努め、わずかの間に多くの門人の中から頭角を現し、16歳という異例の若さで、許されて判者披露をするに至った。

1868(明治元)年5月、天竜川が氾濫し、十湖の家も家屋の大半を流失したが、十湖は蔵に残った米麦を困窮している人たちに分配した。天竜川の渡船の開設、天竜川堤防の決壊の防止など、人々のために尽くした多くのことが、今も語り継がれている。

1880(明治13)年、県庁吏員となり、郡長会開設など重要なことを次々と立案し実現させた。郡長になると、十湖は、まず郡内を廻って実情を調査し、道路や橋の新設改修、学校の建設等をてきぱきと進め、農業振興には特に力を注いだ。このような多忙な公務の中にあっても、十湖は、俳諧から離れることは一日もなかった。

1886(明治19)年8月、引佐郡鹿玉郡長を辞任した。十湖が去る日には、大勢の人たちが長い列を作って郡境の曲り松のところまで送ってきてくれた。

1894(明治27)年、俳号の十湖を本名とした。

1896(明治29)年には、豊西の御嶽神社に百人一句塚を建てた。

1906(明治39)年以後公職を離れ、報徳と俳諧に専念した。



(浜松は出世城なり初松魚)

八幡宮にある句碑

文芸館所蔵の加藤雪腸宛て石川啄木書簡

浜松文芸館には加藤雪腸宛ての石川啄木書簡が所蔵されている。小型の便箋6枚に、雪腸の質問に答えて自身の現状や心境、短歌についての考え、社会主義などに触れた大変貴重な啄木や雪腸研究に欠かせない手紙である。雪腸35歳。啄木は25歳の若さだったが、この後5か月足らずでその生を終えている。

雪腸の長男加藤万古刀氏の寄贈になる。手紙は表装されて大切に保管されている。

書簡は、明治四十三年十一月二十九日の日付けで、宛名は「遠江浜松元城九二 加藤孫平様」。裏面には「本郷区弓町二の一八新井方、石川啄木」とある。

御手紙拝見致候、小生俳句の事は一向に存せず候へどもお手紙によりて成程さる事もあらんかと存候、従来の俳句には誰も困却して手をつけずに置きたる一部面はたしかにあるものの如し、それが俳句に歌ふには何事かの差支あるものなりや、或いはまたやってやれぬ事もなきものなるや、其辺の事は小生には解らず候へど、兄がそれを短歌の方に試みられんとするは面白き事なるべくと存候、但し兄の態度と、徹頭徹尾実感尊重といふことに傾きつつある小生等の歌何の点にて、或いは何の点まで一致すべきかは是又今のところでは小生には解りかね候、どしどしお作を見せて頂きたきものに候、箇条書御質問に対し小生のお答し得るだけのものをお答へ致候

- 1、夕暮、牧水、白秋策によしと思ふ歌あり、只今にては土岐哀果氏の作風を最も注目いたし居候、これは土岐氏を他の人より優れたりといふ意味に於てでなく、同氏のねらってあるところが小生の狙ってある所に一番近きやうに思はれ候ために候
- 2、現在に於ては特に深き因縁ある雑誌といふもの無之候、自分の雑誌（歌本意でなく小生の或る思想も発表する為の）を小さくてもよから一つ欲しきものと存居り候へど貧乏者の小生にはこの望み一生遂げられさうになし
- 3、「一握の砂」は二、三日中に出来る筈に候が、この外に二十才の時出した新体詩集「あこがれ」あるのみ、但しこれは目下絶版、且つ読むべきやうなものには無之候

雪腸は、静岡師範学校在学中に正岡子規門下に入った。同年の高浜虚子、河東碧梧桐らとも親交があったが、俳句の革新を目指す碧梧桐に近かった。定型、客観写生を標榜するホトトギス派に不満を持ち、新しい俳句を模索していた雪腸の目に留まったのが朝日歌壇の選者をしていった啄木の存在ではなかったか。2、3日中に出ると書いている通り「処女歌集「一握の砂」は、明治42年12月1日、東雲堂書店より刊行された。

はたらけど はたらけど猶わが生活楽にならざり じっと手を見る
石をもて終わるごとく ふるさとを出でしかなしみ 消ゆる時なし
ふるさとの訛なつかし 停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく

等々、身近に題材をとった三行書きの「生活」をうたった口語短歌は雪腸の心を動かし、彼を自由律俳句の世界へと導いたのである。この時啄木一家は、理髪店「喜之床」2階の二間に妻子・両親と同居していた。10月4日に生まれた長男真一を27日に失っている中で、誠意ある長文のこの手紙を啄木は書き送ったのである。 (つづく)